

ありすがわ たるひと
有栖川宮熾仁親王と出口王仁三郎

落胤問題を実証する

(十七)



出口和明

和宮と天璋院の対立

和宮は一月一四日板橋、一五日江戸の九段中ヶ淵の清水御殿に到着した。しかし和宮が入城したのは、ようやく一二月一日になつてからである。風邪が表向きの理由だが、それだけではないらしい。岩倉具視が正親町三条に送つた手紙(一二月五日付)にも、その辺の事情が察せられる。

……(幕府側の応接について)宮御方なにをおおせ出され候ても、橋卿(橋本実麗、和宮の伯父)とかく申され候ても、雪州(京都町奉行所関行篤)「さようのこととおおせられ候てもイケヌことイケヌこと、内実は主上(孝明天皇)お妹お一人を江戸へお売りなされ候こと、万事主上と殿下(九条関白)とご承知のこと」などと心切(親切)らしく申し立て弁舌にまかせ言い廻し候旨にて、宮にも大嘆息の御様子、橋卿にも不服の趣き無理にもこれなく……。

また京から従つた女中の様子を伝える。

女中向きいず九も無事の由に候、しかし居所、食物いずれもきびしきものの由。針妙(宮廷女官の私室にいる上級の女官、裁縫などにあたる)向きは泣き暮らし候。一口にだまされたと申しおり候よしにて……。

かりに幕府に悪意はなくとも、江戸と京都との風俗習慣の相違に加えて、それぞれおつき女中たちの女性らしい競争心が一層円滑さを失わせたのであろう。

厄介なのは、和宮にとつて姑にあたる天璋院の存在である。天璋院は島津一門の忠剛の娘篤姫であり、近衛忠熙の養女として前將軍家定に嫁した。家定の先妻に、鷹司政熙の女天親院と一条忠良の女秀子がいたが、二人とも早死したので、天璋院は三度目の正室として大奥に絶対の力をふるっていた。勝気な性格の上に、家定の後継をめぐる政治的対立にまきこまれたため、家

茂に降嫁した和宮には決してよい感情を持っていなかった。

そこへもつて、和宮からの贈り物に「天璋院へ」と敬語を略して上書きしてあったのが（和宮はあずかり知らぬことであるうが）、天璋院はじめ大奥の女たちの立腹をかつたらしい。また和宮と天璋院との対面の折、正面の中央に褥しとねを敷いて天璋院の座とし、その下座の左わきに褥も出さず和宮を着座させた、などと京から従ったおつきの女官たちは無礼をならし立てた。たとえ姑であろうとも、皇女である和宮が上座に着くべきだ、というのである。ともかく、大奥での和宮の座は決して暖かいものではなかった。

文久元（一八六一）年三月、長州藩では、直目付長井雅楽うたの建白した「航海遠略策」が藩是はんぜと決定する。長井の建言は和宮降嫁奏請など一連の幕府の公武合体の動きに応じたもので、朝廷の鎖国攘夷の方針を変え、開国進取の方針によって大いに国威を張り、公武合体・海内一和しようという雄大な構想である。藩主毛利慶親よしちかは、信任する長井を幕府と朝廷に派遣して政治工作させ、一時は成功するかに見えたが、藩内外の猛烈な反撥をくい、翌文久二年には一転して長井の失脚となる。長井はこの年、国内屏居へいさぶ、ついで自刃を命ぜられる。

その後、長州藩では尊王攘夷派が主導権をにぎって「破約攘夷」説をとり、「もし朝廷への忠節が傷つくような場合には、幕

府への信義に欠けることも、防長二藩をなげうつことも止むを得ず」という藩是を確定した。七月には藩主毛利慶親、世子定広が入京して、国事周旋にあたる。以後、長州藩の志士は尊攘派の代名詞ともなり、長州はその拠点となった。

一方、薩摩藩では、安政五（一八五八）年七月藩主島津斉彬なりあきが死ぬと、斉彬の弟久光の長男忠義が藩主になった。久光は忠義の後見役となって藩の実権をにぎる。

文久二年（一八六一）正月一五日、老中安藤対馬守信正は江戸城に登城の途中、坂下門外で尊攘志士の襲撃を受けて負傷する。志士の斬奸趣意書には「……対馬守の罪状はいちいち枚挙に堪ず候えども今その一端をあげて申し候、皇妹御縁組の儀も表向きは天朝より下しおかれ候ように取りつくり公武合体の姿を示し候えども、実は奸謀威力をもつて奪い奉り候えば……」と降嫁問題を第一に挙げている。幕府の思わくと逆に、それほど和宮降嫁は尊攘志士たちの憤激を買い、幕府糾弾の種にされた。

さらに和宮降嫁に働いた岩倉具視・千種有文ちくさあひみ・富小路敬直・久我建通・女官今城重子・同掘河紀子は四奸二嬪ひんと称えられ、一部延臣や尊攘志士の圧迫を受けて官を辞し、頭を丸めて京都郊外に隠棲する。九条閔白も同じく謹慎の身になった。天誅てんしゅうの第一陣に九条家の家士島田左近が血祭りに上げられ、長野義言の

妾村山可寿江も三条大橋の橋柱にしばられて生き恥をさらすなど、血なまぐさい風は京の市中に吹き荒れるのである。

二月一日、将軍家茂と和宮の婚儀が行われる。同年の家茂と和宮の年若い一対は、時にほほえましいものがあつたらしい。

(敬称略)

―再び遺稿について―

出口 禮子

実は、この十月号をもって、和明のワープロ入力分は、終了です。本稿の下敷きである三十年前『おほもと』誌に連載した「随想大地の母」の分量は、まだ三分の二近く残っておりますが、和明の歴史認識が、ここ三、四年の間に、大きく変化したために、本人の考証なしでは、そのままの掲載がためらわれます。

でも、目的とする「落胤」の証し問題は重要ですので、今後を託された私の責任において、割愛すべきは除き、焦点をしぼって、ひきつづきの連載をお願いいたしました。昨年度五月号より始めて十七回、お読みいただきましてありがとうございます。

なお、和明の歴史認識の変化につきましては、時を得ることができませんでしたら、及ばずながら語りたいと念願いたしております。



二〇〇年五月十四日 第六回青少年研修会にて